

東方学院松江校

仏教と日本文化



講師 荻輪 顕量
東京大学大学院教授
博士(文学)

集中講義

茶道において、仏教の与えた影響を中心に考察。
古代から近代にいたるまで、お茶の歴史と仏教思想
との関わりを講義します。

仏教が日本に伝来した後、大きな影響を日本文化に及ぼした。とくに中世の時代には、能楽やお茶の文化に大きな影響を与えた。それは、天台と禅宗の影響によるものが著しい。この講義では、茶道において、仏教の与えた影響を中心に考察したい。今、日常に飲むようになってお茶は、早くは天平時代にすでに伝わっていたことが資料から知られる。そのころのお茶の飲み方は、団茶と呼ばれる格式張ったものであった。お茶は中国において陸羽という人物が『茶経』を書いたところから、大きく展開しているようである。お茶には、団茶、抹茶、煎茶という三種類の飲み方が存在するが、時代的に流行が存在し、その最初期を飾るのが、団茶であった。この団茶は塊のお茶を粉にしてお湯に投じて飲むものであった。長安の郊外の法門寺には、唐代の最高のお茶道具が伝わったことで有名である。

さて、日本においては、平安時代にこの団茶を飲んでいたことを彷彿させる記事が『菅家文草』の中に見える。後にしばらくお茶の記録は見えなくなるが、これはお茶自体がそれなりに普及をしたことが背景にあると考えられる。これが再注目されるのが、中世初頭の禅宗僧侶、すなわち栄西による抹茶の飲み方の再輸入である。中国宋代、禅宗の叢林に存在したお茶の習慣が、日本に紹介され広まっていくことになったのであるが、この叢林のお茶の作法は格式張ったものであった。それは「禅院茶礼」と呼ばれ、寺院の儀式の一部でもあった。このお茶の飲み方が、「下々のお茶」と呼ばれた格式張らないお茶の飲み方と融合し、やがて日本独自の茶道が成立するのである。

思想的に仏教の影響が見られるのは、この抹茶を飲む茶道においてである。その出発点に位置する人物が奈良の浄土宗の僧侶であった村田珠光である。彼は徳大寺の一休宗純に参禅して教示を受けたところから、禅と茶道は切っても切り離せないものとなった。その最終的な姿は、江戸時代初期の『禅茶録』に結実する。このように中世の時代には禅林の影響の中で抹茶が、近世には黄檗宗の影響で煎茶が広まった。本講義では、古代から近代に至るまで、お茶の歴史と仏教思想との関わりを講義する予定である。

とき 8月6日(土) 13:30~16:50

8月7日(日) 10:30~15:00

場所 中村元記念館(松江市役所八束支所2階)

受講料 ¥4,800 (他に入会金 ¥10,000 (継続の方は¥5,000) が必要です。)

お申込み・お問い合わせは

中村元記念館

〒690-1404 松江市八束町波入2060

TEL

0852-76-9593

E-mail

info@nakamura-hajime-memorialhall.or.jp

URL

http://www.nakamura-hajime-memorialhall.or.jp/index.html